

類型論から見た日本語と中国語 ——視点固定型の言語と視点移動型の言語

彭 広陸（北京大学）

キーワード：日本語 中国語 視点 固定型 移動型

0. はじめに

近年、言語類型論 (linguistic typology) の研究が脚光を浴びていることは周知の通りであるが、それは一般言語学に貢献するのみならず、外国語教育にも貢献するところが大きいからであろう。類型論のアプローチが対照言語学の研究成果を踏まえているのは言うまでもないことであるが、日本語と中国語との類型上の相違点を明らかにするためには、両者を比較するのは必要不可欠である。

日本語と中国語との対照研究においては、いままでは数多くの問題が取り上げられ、多大な成果が上げられているものの、全体的に見た場合、<視点 (view point、point of view、vantage point、perspective)>という視座が欠けている印象を受ける。往々にして、対照研究においては個別的な言語現象に関する研究 (ケーススタディー) で得られた結論は有効性が限られているものであり、<視点>を取り入れれば、複数の言語現象に包括的な解釈を与えることができるようになり、かなりの程度において中国語と日本語との本質的な相違を明らかにすることが可能になるのではないかと考えられる。

今までは、<視点>からの日中両語に関する体系的な研究はまだ見かけないが、下地早智子の幾つかの論考が示唆に富んでいて注目に値する。

本研究は、いくつかの文法現象を手掛かりに、「日本語が視点固定型の言語であるのに対し、中国語は視点移動型の言語である」という仮説を立てて、その有効性の論証を試みることを目的とする。ここで中国語と日本語を視点において対立するものと見ているのはあくまでも相対的なものであることを断っておく。

1. 視点のいろいろ

<視点>という用語は、今までは多くの研究領域で様々な意味で使用されてきた。

1.1 心理学における視点

<1> 「視点」とは直接には見えないものであるが、私達の背後にあって、その時のその場所における私達のモノの見方や言動を方向づけ、同時に私達のその時のその場所における「心」のあり方を私達の「心一般」の中に位置づけるものである、と言えよう。(鈴木情一 1992)

1.2 絵画における視点

<2> 高いところから地上を見ると、近くのものほど下の方に、遠くのものほど上に見えるが、これを絵画に当てはめて、近いものを下に、遠いものを上に描く方法が、「上下による遠近表現」である。この上下による遠近も絵画一般に見られるものだが、このうち景観などをより高所から見下ろすように描く方法を「俯瞰法」と呼んでいる。これによって、より広大な景色を手取るように描くことができる

彭 広陸

が、同じ俯瞰法でも、ヨーロッパと東洋とでは異なっている。ヨーロッパでは視点はほぼ固定されている場合が多く、遠くのものほど小さく、またぼんやりと薄く描かれる。これに対して、東洋では、目の位置を自由に移動させ、それぞれの対象が一番よく見えるところから見たように描くことが多い。

(『絵画の知識百科』島田紀夫監修、主婦と生活社、1990、p.108)

無論ここで言われているヨーロッパの絵画は油絵によって代表されるものであり、東洋の絵画は中国画（墨絵）によって代表されるものであるが、それぞれの視点に見られる特徴は、中国語では“**焦点透視(Focused View)**”、“**散点透視(Distributed View)**”というふうに区別されている^[1]。

1.3 物語論における視点

実際に<視点>という用語が多用されている分野はむしろ文学であり、特に物語論（ナラトロジー）においてである。そして、以下に見られるように視点の類型が三つに分類されるのが普通である^[2]。

- ① 無制限な（無設定の）視点
- ② 内的視点
- ③ 外的視点

なお、<視点>のことは<焦点化>と呼ばれることもある。

<3>まず、どのような視点から虚構の物語の中で物語られることが伝達されるのか、という問いに限定して目を向けると、焦点化の三つの異なるタイプが考えられる。ジュネットとともに、それらをここでは、<ゼロ焦点化（＝局外の視点）>、<内的焦点化（＝作中人物の視点）>および<外的焦点化（＝中立的視点）>と呼び、まずはただ標語的に、説明を加えておくことにする。

- 1 ゼロ焦点化……語り手>作中人物（<俯瞰視点>）—語り手は、作中人物の誰かが知っている、ないしは知覚しているよりも多くを知っている、ないしは物語る）
- 2 内的焦点化……語り手~作中人物（<共有視点>）—語り手は、作中人物が知っている以上のことを語らない）
- 3 外的焦点化……語り手<作中人物（<外在視点>）—語り手は、作中人物が知っているよりもわずかしか語らない）

(マティアス・マルティネス、ミヒャエル・シェッフェル 2006 : 87~88)

1.4 言語学における視点

<視点>という概念を積極的に日本語学、あるいは日本語と英語との対照研究に導入した研究として、大江三郎（1975）、久野暲（1978）及び奥津敬一郎氏の一連の論考がよく知られている。次に、ここ10年来世に問うた、類型論の観点から<視点>を取り上げた幾つかの代表的な説を見てみよう。

<4>そこで、話を「私」に戻すが、古来、日本人は話者自身を指す「私」の視点で周りや事物や人物をとらえる。常に己との関係で自分を取り巻く対象を把握する。そのような対象とは客観的な存在としての事物ではなく、あくまで自己とどのような関係にあるかによって存在の意味を持つ「私」中心の観念であったといつてよい。(中略)

日本人、そして日本語は、自己を離れては世の中すら把握することができない、極めて「私」中心の世界観の言語であったというべきである。（森田良行 1998：26-28）

- < 5 > 英語話者は、自分を包んでいた自然から自己を引き離し、もはや自分自身さえも対象化して、出来事の外部の上空から客観的に眺める「神の視点」を持つに至った。それに対して、日本語など多くの言語では話者の視点は対象化、客体化されなかった。出来事の内部、地上の「虫の視点」に留まっているのである。（中略）

「神の視点」の方は不動である。言語化されようとしている状況から遠く身を引き離して、上空から見下ろしている。そしてスナップ写真のように、瞬間的に事態を把握する。時間の推移はない。

「虫の視点」はその反対で、状況そのものの中にある。コンテキスト（文脈）が豊かに与えられている。そしてこの視点は時間とともに移動する。あたかも虫が地上を進んでいくように。あるいはトンネルを走る列車の乗客や、家の周りを行きつ戻りつしている人のように。（金谷武洋 2004：14-31）

- < 6 > 論理の飛躍と話題の変化という二つの特色は、実は視点移動という日本語に共通する特質の表れであるというのが私の主張である。（中略）

日本人は本来高く広大な位置に視点を固定させて全体を見通す長編小説などに適さない民族なのである。日本人がなぜ高い所に視点を固定させず、低い所で視点を移動させるのか。それは、また全体の構想よりも部分の構築に力を注ぐ日本文化の顕著な特質にも繋がっているはずである。（中略）

なぜ日本語は視点を転々と移動させるのか。

この特質は日本語だけのものではない。日本の伝統文化そのものがそのような特色を持っている。（中略）

日本語に限らず、日本文化全体に通じる低い視点の頻繁な移動という特質はなぜ生じたのか。私は、その理由を日本人のアニミズム、多神教信仰に求める。（中略）

他方、キリスト教に代表されるような一神教の信仰では、絶対の神の視点ですべての存在を秩序づけ、価値づける。そのために絶対神からの遠近の距離にしたがって大小と価値がきまる。遠近法である。

多神教文化は部分を重視するのにたいし、一神教文化では、全体が重視され、統一された秩序の中に部分が配置される。（諏訪春雄 2006）

- < 7 > 英語では日常会話においても、文を構成する際、日本語と異なり、視点を話し手から引き離し、話し手自身をも客体化して表現しているのだ（中略）。日本語では、一人称者すなわち話し手に付随した視点から文を構築する。（甘露統子 2004）

- < 8 > 英語のように客観的把握型の言語では、①のルール（参与者に話し手が含まれる場合には、話し手に視点が置かれやすい—引用者）はあるものの、それ以外ではすべての参与者が対等に扱われる。このため、どの視点からながめるかという点に関しては、話し手、または聞き手が気持ちを寄せた人物が相対的に多くなることはあっても、それに固定されるということは少ない。

これに対し、日本語のように主観的把握型の言語では、どの視点からながめるかという点においては、特別な理由がない限り、話し手、または聞き手が気持ちを寄せた人物ということになり、視点が固定される。（森山新 2006）

一方、中国の言語学者申小竜（1988：445-449）も視点の問題を取り上げている。

- < 9 > 在某种意义上说，西方语言的句子是一种焦点视语言。（中略）

汉语的句子思维不是采用焦点透视的方法，而是采用散点透视的方法，形成独特的

流水句の格局。(中略)

西方言語の句子分析可以以動詞作中心控制成分格局，這是一種“靜態”視點，漢語句子沒有這樣一個中心，而是“動態”滾動的。(中略)

中西言語句子構造的不同就在於形態上的焦點視與散點視之分，過程上的靜態視與動態視之別。這兩組不同質的視點的對立，深刻反映了中西時空觀的差異。西方哲學、藝術和語言注重的是自然時空，而且特別偏重空間的自然真實性。英語的句子以定式動詞為核心，運用各種關係詞組成關係結構的板塊，前呼後擁，遞相迭加。這正是一種空間型的構造。中國哲學、藝術和語言注重的是心理時空、而且特別偏重於時間。即使是空間，也常表現為流動空間。(中略)

中西言語的這種差異同中西藝術之異有着驚人的相似之處。

上記の先行研究に見られる〈視点〉に関する主張を、「移動」か「固定」かの観点から表2のようにまとめることができるだろう。

表 1

	日本語	英語	中国語
森田良行	視点固定型		
金谷武洋	視点移動型	視点固定型	
諏訪春雄	視点移動型	視点固定型	
甘露統子	視点固定型	視点移動型	
森山 新	視点固定型	視点移動型	
申 小竜		視点固定型	視点移動型

見解が分かれていることは一目瞭然である。具体的な検証は次節以降に譲るが、英語はしばらく不問にしておいて、「視点」における日本語と中国語の類型上の違いについての筆者の考えを先に言うと、以下の通りである。



池上嘉彦(2006)が、日本語話者は〈主観的把握(subjective construal)〉を好む傾向が強く、「いま/ここ」にこだわり、日本語は〈自己・中心的〉な特徴を色濃く残している言語であることを主張している。加藤周一(2007)も長年の研究を踏まえて独自の日本文化論を展開し、「かくして日本では人々が『今=ここ』に生きているように見える。その背景には、時間においては『今』に、空間においては『ここ』に集約される世界観があるだろう。世界観は文化によって異なる。すなわち時間と空間に対する態度、そのイメージや概念は、文化の差を超えて普遍的なものではなく、それぞれの文化に固有の型をもつにちがいない」(p.4)ことを説いて、更に「『全体から部分へ』ではなく、『部分から全体へ』という思考過程の方向性は、『今=ここ』の文化の基本的な特徴である」(p.11)と指摘している。

両氏の主張が正しいとすれば、日本語話者の「今=ここ」へのこだわりは、正に日本語の視点が固定していることを物語っているのではないかと思われる。

1.5 「視点」に関する定義

ここでは、まず言語学の立場からの〈視点〉についての定義を見てみよう。

- <10>以下に述べる「視点」とは、言語行為（Speech Act）において、話し手（あるいは書き手）があるできごとを描写しようとする時に話し手（あるいは書き手）自身が占めている空間的（spatial）、時間的（temporal）、心理的（psychological）な位置といった意味である。（澤田治美 1993：303）
- <11>ここで言う「視点」は広義の意味で使っており、英語では‘perspective’に当たるものである。語源情報を手掛かりに、perspective の意味を別の表現に置き換えれば、‘see through’となる。そこで、視点とは‘see x through y’（yを通してxを見る）という認知操作のことであると、差し当たり規定しておくことができよう。（田中茂範・松本曜 1997：103）
- <12>本書がテーマとする「視点」とは、記述しようとする事態や状況を話者がどのような観点から観察し、とらえ、解釈するかという言語主体の認知的作用の一側面を指す。（谷口一美「まえがき」、河上誓作・谷口一美 2007）

先行研究に見られる諸規定を踏まえて、筆者はここで「視点」について次のように規定しておきたいと思う。

- <13>「視点」とは、単語・連語・文・テキストそれぞれの言語的単位のレベルにおける言語主体（命名者・話者・語り手を含む）の事象へのとらえ方である。具体的に言うと、事象を、誰が見ているのか、どの部分を見ているのか、どのように見ているのか、という言語主体の心理的操作であり、そして何らかの形で言語化されるものである。

なお、<視点>は、その性質に基づいて<空間的視点><時間的視点><心理的視点>に分けられることがある⁴。更に、茂呂雄二（1985）では、<視点>の基本的要素として、<視点人物（誰が見るのか）><視座（どこから見ているか）><注視点（どこを見ているか）><見え（見たこと）>という四つが挙げられている。

2. 主観的表現と視点

紙幅の制限で、ここでの主観的表現は主に人間の感情・感覚を名付ける形容詞を述語にもつ文に限定したいと思う。

2.1 人称と人称制限

言語学の用語としての「人称」は、屈折語に属する言語に見られる、動詞の語形変化によって人称（一人称・二人称・三人称）の違いを表し分ける形態論的なカテゴリーを指すのが普通である。例えば、ロシアの場合は屈折語尾（下線の部分）によって人称が表し分けられている。

- (1) a. Я читаю. (私が読む)
b. Ты читашь. (あなたが読む)
c. Он читает. (彼が読む)

日本語には上記のような「人称」が存在しないものの、次のような「人称制限」という現象が容易に観察される。

- (2) a. (私は) 嬉しい。
b. *花子は嬉しい。
c. 花子は嬉しいようだ／嬉しいらしい／嬉しそうだ／嬉しいのだ／嬉しがっている／嬉しいそうだ。

「人称制限」とは、ひとまず「文法の諸相（形態論と構文論の諸カテゴリー、及び文の文法的な形・文法的な構造・文法的な意味）に対する人称（一人称・二人称・三人称）の制約である」というふうに規定しておこう。日本語におけるこのような「人称制限」はどこからきているのだろうか。それについては、いままではいろいろな解釈がなされてきた。

2.2 認識論説及びそれに対する修正としての語用論説

感情形容詞と感覚形容詞を述語に持つ文に見られる人称制限については、以下のような代表的な考えが見られる。

- <14> 日本語では感情を表わす形容詞は原則として話者自身の感情を示す。……日本語話者の意識の中に、「感情は話者自身のみが感じるもの」という観念があって、感情形容詞をそのままむきだしに三人称に用いることをきらうのだと考えられる。（水谷信子 1985 : 36~37）

このような認識論はかつて有力だったが、後に否定されるようになる。

- <15> まずはじめに指摘しておきたいことは、人物の内的世界の事態を表すものとしては、その事態を直接に表出する情意表出型の文と、知識・情報として表現・伝達する演述型の文が区別される、という点である。このうち (4) のような内面の状態を直接に表出する文の場合、感情主が 1 人称に限られるのは当然のことであり、日本語に特有のことではない。

- (4) 悲しいなあ
(中略)

一方、事の真偽が問題となる演述型の文の場合、日本語では感情主が 1 人称の場合を除いて、断定形の述語を使用することは、(5) の文が示すとおり、不適格であり、代わりに (6) から (8) の文のような非断定形の述語が使われる。

- (5) *花子はとても悲しいよ
(6) 花子はとても悲しそうだよ
(7) 花子はとても悲しいようだよ
(8) 花子はとても悲しいらしいよ

このような演述型における人称制限の存在は、自明のこととは言えない。このような制限を持たない言語は珍しくないのである。それでは、なぜ、日本語において 1 人称以外では断定形の述語が使えないのであろうか。(中略)

人物の内的世界の事態を表す演述型の表現に見られる人称制限の存在は、他者の内的世界の事態は直接に認識することができないという認識論的な見方によってではなく、他者の私的領域を侵害することは適切ではないという語用論的な見方によって説明されるべきである。(中略)

(21) 人物の内的世界はその人物の私的領域であり、私的領域における事態の真偽を断定的に述べる権利はその人物に専属する。

(21) の原則によって、他者の私的領域に属する事態を表現する場合、表現者がその事態の真偽をどのように見ていようと、非断定形の述語が用いられると考えられるわけである。断定形を使用すると、(21) の原則のために当該の人物の権利

を侵害する事になるのである。（17：*花子はとても悲しいよ。）や（19：*弟は芸術家になりたいよ。）のような文が非文になるのは、他者の内面を知りえないという理由のためでなく、他者の権利は侵害すべきものではないという理由のためである。（益岡隆志 1997）

確かに益岡隆志（1997）によって指摘されている通り、感情・感覚など人間の心理的・生理的な状態を直接に知ってストレートに表出できるのが当の本人に限られているというのは、当たり前なことであり、何も日本語に限ったことではあるまい。益岡隆志は、演述型の文における人称制限の存在が他者の私的領域である内的世界を侵害すべきではないという語用論上の理由に起因するものだと力説して、多くの人の賛同を得ているようである。しかし、このような捉え方は、やはり考え直す余地が残っているように思われる。なぜなら、益岡説に従えば、人称制限が存在しているのは他者の権利が侵害すべきではないという理由によるのであれば、人称制限が存在しない場合は、他者の権利は侵害してもよいという理由によるということになるのだろうか。事実、以下に示すように、中国語では、一人称と三人称について同じ表現（断定的な表現）をしても文法的にも語用論的にも何ら問題がないのである。

- (3) a. 我难过。（私は悲しい。）
- b. 她难过。（彼女は悲しがっている／彼女は悲しいのだ。）

それでは、“她难过”という時には、彼女の権利を侵害することになるだろうか。答えははっきりしている。というのは、益岡隆志の主張するように、話し手が第三者である“她（彼女）”の内的な状態を直接に知って、そしてそのまま表出することができないので、最初から彼女の権利を侵害することはあり得ないからである。すなわち、一人称についても三人称についても同じ表現をしているとはいえ、文のモダリティのタイプが人称詞による人称の明示のため、おのずと異なってくるのである。言い換えれば、人称が違えば、文の表現形式が同じであっても、モダリティのタイプが当然のことながら違ってきて（表出型か演述型か自然と判明できるようになって）、三人称の場合は表出があり得ないので、権利の侵害もあり得ないということである。

「権利侵害説」が当を得ていないとすれば、なぜ日本語では、感情表現の場合、一人称と三人称とは異なった文法的な形を取るのが義務的になっているのか、という問題を考え直す必要が出てくる。

2.3 視点論の展開

日本語の人称制限を引き起こす理由を究明するためには、＜視点＞の導入が必要になってくる。更に通言語的に考えねばなるまい。筆者はかつて党淑蘭（1991）に啓発を受けて以下のように述べていた⁴⁾。

<15> 日本語は、自己中心型の言語だとでも言えるように、特別な文体（小説の地の文）などの場合を除いて、いつも視点を話し手自身に置いていて、自分を中心にして表現する傾向があるという。（原注 51：党淑蘭 1991 を参照）つまり、日本語では、文は一人称文になるのが基本的なパターンになっている。したがって、一人称代名詞をいちいち使わなくても自ずと意味が判明されるわけである。ところが、一人称文でなくなると、一人称文と区別する、言い換えれば、一人称文でないことを表わすためには、一人称文と異なる文法的な形を取ったり同じ文法的な形が異なる文法的な意味を表したりする必要が出てくる。（彭広陸 1994）

甘露統子 (2004) は以下のように、真正面から〈視点〉という概念を用いて形容詞述語文に見られる人称制限の本質を捉えていて、評価すべきである¹⁶⁾。

<16>以上の考察により、感情形容詞の断定形にかかる人称制限について、このような現象が引き起こされるのは、これまでいわれたような認識論的、語用論的な理由からではなく、文章を構成する際に、話し手がもつ視点を移動させずにそのまま採用して構文行動を行う日本語の特性によるのであると結論できる。

筆者の現段階の考えを示すと、以下の通りとなる。

日常的な会話においては、人間の内的な心理状態 (=感情)・生理状態 (=感覚) を直接に体験してそのまま表現すること (いわゆる表出) は本人 (第一人称) にしかできないことであって、三人称にはあり得ないことではあるが、それでも、日本語では、一人称にしか見られない表出型の文と、三人称に見られる演述型の文を形式的に区別しなければならない理由は〈視点〉に求めることができるだろう。すなわち会話では、基本的に〈視点〉が話し手自身に置かれている (固定している) ので、形容詞の無標の形である非過去・断定形が一人称専用の形になってしまい (一人称における表出専用の形ということにもなり)、三人称に〈視点〉が置かれて述べる (語る) 場合は、一人称の場合と区別するために特別の形を取らなければならなくなっているのではないかと考えられる。

それに対して、中国語の場合は、〈視点〉が不定なものであり、言い換えればいつも〈視点〉が移動しているので、常に人称をはっきりさせておかなければならず、人称代名詞がよく使用されている所以である。人称さえ分かれば、文のモダリティのタイプも自然に判明されるようになり、形式的な違いがなくてすむわけである。

更に、日本語において、一人称に専用の形が見られるのは、形容詞のみならず、動詞のアスペクトにおいてもである。例えば、「(と) 思う」が一人称、「(と) 思っている」が三人称に用いられることは周知の通りである。奥田靖雄 (1992) では、状態動詞のアスペクトにも人称による使い分けが見られることを指摘している。例えば、「しびれる」は一人称、「しびれている」は三人称に用いられるというふう¹⁷⁾に。

2.4 表出表現への見直し

2.4.1 日本語の場合

以下の例に見られるように、日本語の表出の文では、いわゆる感情・感覚形容詞 (希望形容詞も含む) が裸の形で使われることもあるが、終助詞と共起することが多いのは特徴的である。そして、主語が言語化されていないのが省略というよりは、表出文の本来の姿とすべきであろう。

(4) 「すごく嬉しいわ。大事にする」 (『いま、会いにゆきます』 p. 173)

(5) 「あたたかいわ」

「その言葉」

ぼくは言った。

「懐かしいな」 (『いま、会いにゆきます』 p. 183)

(6) 「つらいな」

彼女は言った。

「行きたくないな。まだ、ここにいたい。佑司が大きくなっていくのを見ていたい。あなたのそばにずっといたい」 (『いま、会いにゆきます』 p. 329)

(7) 「そう、これが本物だよ」

「なんだか、こわいよ」 (『いま、会いにゆきます』 p. 347)

(8) アパートに戻ると、ぼくは氷漬けにされた。医者からの指示だった。

「寒くない？」と滯は訊いた。

「寒くないよ」

ぼくは言った。

「気持ちがいい。アルプスのアイスマンになった気分」

（市川拓司『いま、会いにゆきます』2003、p. 277）

2.4.2 中国語の場合

中国語の表出文を見ていると、全部主語が使われているのではないことに気づく。それは、何らかの形で一人称文、そして表出文であることが保障されていれば、一々主語が使われなくてもよくなるからだと考えられる。例えば、例（10）は回答文であるので、一人称であることが明らかである。更に、特徴的なのは、程度副詞の使い分けによって表出文であるかどうかを見分けることができることである。例えば、（11）～（15）までは、主観的程度副詞（“真”“太”）が使われているので、表出文であることが条件づけられている。

- (9) 有时半夜，他把我推醒，问我：“你做什么梦？这么拼命哭。”“什么也没做。”我不想告诉他。“还有什么不能跟我说吗？”我说总梦见被一个巨大的、不断膨胀的黑物吞噬。我紧紧搂住他：“我害怕。”“怕我？你还有什么不满足？”“不。”我使劲摇头，“我满足。”“我也满足。”他说。（《王朔自选集》p. 81）
- (10) “……都是比你还年轻的青年人，对比人家你就不惭愧？”“惭愧。”“不感动？”“感动。”（《王朔自选集》p. 702）
- (11) 他一边开车一边打啊欠，使劲眨巴着眼盯着昏暗的大街前方。“累，真累。”他看了我一眼说，“困劲儿又上来了。”（《王朔自选集》p. 626）
- (12) 于观猛地站起，握着双拳往外走，“我们就到街上去，找那些穿着体面、白白胖胖的绅士挑挑衅。”“真舒服，真舒服，老没这么干了。”（《王朔自选集》p. 706）
- (13) “跟你们在一起真快活。”宝康感慨地说，“什么都不在乎，活着真舒心。”（《王朔自选集》p. 674）
- (14) “再来我叫警察把他拘起来。”马青说，“太烦了，我妈什么时候给我生过这么一个哥……”（《王朔自选集》p. 704）
- (15) “我帮助你，想不想学着写小说？”“噢，太想了。可我行吗？”（《王朔自选集》p. 690）

一人称文でも、客観的程度副詞が使われていると、三人称文と同じように物語り文（演述型の文）になる。すなわち話し手自身の内的な状態を客体化して語ることになるのである。述語の形式によって、表出と物語りを区別する日本語とは違って、中国語の場合は、程度副詞の種類によってそれが表現されていると言えそうである。そして、例（17）における“总是（いつも）”という時間副詞も物語り文の表現手段の一つになるのである。

- (16) “我们结婚了，没告诉你真抱歉。他对我特别好……我很满足。”（《王朔自选集》p. 82）
- (17) 客厅传来马青一个人的快速说话声，当他停顿时，响起一片欢笑，笑声刚停，杨重又说了几句什么，笑声再起。“你这两个同事逗的！”“他们是我最好的朋友。”丁小鲁手停了一下，又继续剁菜：“你终于有这样的朋友了。”“和他们在一起我总是很快乐。”（《王朔自选集》p. 666）
- (18) 饭吃到一半，气氛实在沉闷，我们都很别扭，又快喝醉了，她终于忍不住，求我讲讲我的女朋友。我自己也很想讲，便把我和晶晶的关系始末细细讲了一遍。讲完后，她眼泪掉得抬不起头，我知道勾起了她的伤心事。“我也曾追求过真情，可总和肉体遭遇。”她说，“我很灰心。”（《王朔自选集》p. 47）

- (19) “我是在极端苦闷中退的职。当时，我并不知道将来要干什么。现在我也不知道要干什么，但我始终觉得应该干点什么。我要探索生活的意义，我很难受……”（《王朔自选集》p. 45）
- (20) “真的？真这样我就去，我觉得和你们呆在一起特愉快。”（《王朔自选集》p. 691）
- (21) “那就算我懂得多吧，其实我也觉得和你特谈得来特知音。”“我特愉快。”“我也特愉快。”（《王朔自选集》p. 658）
- (22) “对，我也觉得特空虚，结婚特没劲。”（《王朔自选集》p. 661）
- (23) 许立宇很高兴，直说不必太奢，找一个过得去的馆子就行了。（王朔《王朔自选集》p. 610）

3. 移動表現と視点

中日両語の移動動詞についての対照研究はいままでは多くの研究者によって行われてきたが、その中で、荒川清秀の一連の研究が注目されるべきである。以下では、荒川清秀（1994、2005）を踏まえて、主に視点の観点から中日両語における移動動詞の用法上の違いを観察してみたいと思う。

日本語の「行く／来る」も中国語の“去／来”も話し手のいる場所に視点をおいて使い分けられている点では両者が共通しているが、違う用法もすくなくない。例えば、以下のような場合の、方向性の正反対の「行く」と「来る」の併用は、中国語では見られない現象である^[4]。

- (24) 「ちょっと行って来るよ」（『いま、会いにゆきます』p. 264）^[8]
- (24') “我出去一趟 / 我出去一趟”
- (25) 「祐司」彼はしゃがんで、僕の顔に自分の顔を近づけた。「なに？」「まだ、ポケットの中にはお金が残っている？」「うん。ポップコーン買ったけど、まだ残っているよ」「じゃあ、お願いがあるんだけど」「うん」「ここからひとりで自転車に乗って、近くのコンビニエンスストアまで行って、何か食べるものを買ってきて」「食べるもの？」「うん。パパ、電池切れになっちゃった。また動かすには新しい電池を入れなくちゃ」「そうなの？」「うん。できるかな？」「できるよ」「じゃあ、行ってきて」「わかった」（『いま、会いにゆきます』p. 52-53）
- (25') “那你去吧！”
- (26) 上映開始を告げるブザーが鳴った。祐司はくるりと首を回し、場内に通じるドアを見た。それからまた向き直って、僕の顔を見た。
「行っておいで。始まるよ」
僕は祐司の肩に手をかけると、彼を促した。（『いま、会いにゆきます』p. 44）
- (26') “快去吧！该开演了。”

日本語の場合は、話し手がいる<ここ>に視点が置かれているため、移動の動作の最終的な到達点が話し手のいる場所であれば、その往復の移動を一つの移動の過程と見立てており、「行って来る」という複合的な移動動詞を使っているところに特色が見られる。それに対して、中国語は最初に行う移動動作に視点が置かれているので、一方的な移動動作を名付ける“去”“走”などを使うのが特徴的である。このような相違は以下のような例にも見られる。

- (27) 彼を呼んで来てくれ。
(27') 你去叫他！ = 你把他叫来！ = 你去把他叫来！
- (28) タバコを買って来てくれ。

(28') 你帮我买包烟去! = 你去帮我买包烟! = 你去帮我买包烟去! = 你去帮我买包烟来!

日本語では、「Vて来る」を使っているのは、コンビネーションの動作の最終的な結果（局面）、言い換えれば話し手の現在いる場所に戻るということが重んじられていることを物語っているだろう。中国語では“去V”を使っているのは移動の目的を表現することが重んじられている傾向を見せていると言ってよかろう。もっとも、このような場合は、“去”と“来”が同じ文に共起することも可能になるのだが、それも客体の移動を伴う場合に限られているのである。以下のような場合では不可である。

(29) みんなに知らせて来てくれ。

(29') 你去通知一下大家。

次に挙げるのは例（28）と対照的な例である。

(30) 我去买包烟（中国の映画『安居（榕樹（ガジュマル）の丘へ）』（珠江映画制作所、1997）における男性の主人公のセリフ）

(30') タバコを買ってくる。（日本語の字幕）

以下の例は、日本語が話し手の視点による表現を好むのに対し、中国語は動作主体の視点による表現を好むことを端的に表しているように思われる。

(31) 我们演出，我都给他送票，他几乎都去看，坐在第一排。（《王硕自选集》p. 77）

(31') 彼はたいてい見に来てくれる。

(32) 我妈叫我请你去的，她今天晚上做大蒜烧黄鱼，你过去吃过的，我妈还记得你最爱吃她这道菜呢。（出典失記）

(32') お呼びする（／来てもらう）ようにと母に言われたの。

上述したような相違は以下のような例にも反映されている。日本語では移動動詞が使われているのに対し、中国語に訳すと、移動動詞が出る幕がない。

(33) 「食事だよ。食事」「うん」「ランドセルは調べたか？忘れ物はない？」「うんないよ」しかし、彼は必ず毎日何か忘れていく。（『いま、会いにゆきます』p. 34）

(33') 他每天都落东西。

(34) 「今晚、泊まって行きなさい」

(34') “今天晚上你就住这儿吧!” = “今天晚上你就别走了!”

日本語では「Vて行く」を使っているのは、やはり移動の出発点である<ここ>に拘っている表れと見てよいだろう。

(35) 喝杯茶！（中国の映画『安居（榕樹（ガジュマル）の丘へ）』魚屋の主人がお客さんの主人公に言うセリフ）

(35') お茶でも飲んで行きなよ。（日本語の字幕）

4. ヴォイス表現と視点

日本語のヴォイスには厳しい人称制限が見られるのはよく知られている言語事実であり、それについての研究も多く見られる。ヴォイスが人称に関わっていることは、根本的には

<視点>のおき方に関わっているということになる。中国語の場合は、ヴォイスにおいては人称制限が見られず、日本語とは大きく異なっている。以下では、能動文・受動文・使役文に分けて考察してみる。

4.1 能動文の場合

まず、能動文の場合であるが、<視点>が自由に移動できる中国語では、一人称の代名詞が目的語に立つのは、決して珍しいことではない。しかし、そういう現象は日本語ではあまり見かけられないようである。これは、やはり日本語では<視点>が基本的に話し手に置かれているため、話し手が動作の客体である場合でも、それを目的語に立たせた、動作主体である第三者からの視点による発話が好ましくないからであろう。

繰り返すが、日本語では一人称が受動文・使役文・被役文などのヴォイスの文の補語に立ちにくいばかりではなく、能動文の補語にも立ちにくいのである。これは、日本語ではいつも視点が一人称に固定していて、一人称は二・三人称に対して優位であることを物語っているだろう。中国語の場合は、視点が固定していないため、人称の間は対等になっていると考えられる。

- (36) “我来这儿好几次了，从没见过这家主人。你知道他是干什么的吗？”“说不上来。”
“你呢，你是搞什么的？”她友好地问。电话铃响了，把我救了。我去接电话，是那个女朋友打来的。她开口就骂我，我忍了会儿，她仍骂不绝口，把我骂急了，和她对骂起来，最后情断义绝地挂了电话。（《王朔自选集》p. 4～5）
- (36')) つい堪忍袋が切れちゃって・・・
- (37) 姐姐姐夫又问了些于晶的情况。我告诉他们，于晶是我们国家花鼓灯头子之一，第一届舞蹈大学生，她的几个保留节目常去给首长外宾跳堂会。末了，我补充说，她和我吹了。（王朔《王朔自选集》p. 24, 华艺出版社，1998）
- (37')) おしまいに、(ぼくは) 彼女に振られたと付け加えた。

一つ、見逃してはならないのは、例(36)では、何回も<視点>を変えていることである。一人称小説の地の文ではあるが、視点が絶えず転換していることは日本語と異なる大きな特徴となる。

4.2 受動文の場合

多くの先行研究によれば、中国語は日本語ほど受動文が使用されていないという。受動文は<視点の一貫性>を保つ上で重要な役割を果たしているが、類型論的に見れば、日本語は<視点の一貫性>が強い言語であり、中国語は<視点の一貫性>が弱い言語だということが言えそうである。

中国語では、一人称は二・三人称と同じように受動文の主語にもなるし、補語にもなる。言い換えれば、中国語の受動文には人称の制限がないということである。それに対して、日本語では、一人称があまり受動文の補語の位置に現れないことになっている。

一方、一人称が受動文の主語になったり補語になったりする例は古代中国語にも現代中国語にも見られるのである。まず一人称が主語になる例である。

- | | |
|------------------------|---------------|
| (38) 吾长见笑于大方之家。 | (庄子・秋水) |
| (39) 吾被皇太后征，不知所为。 | (三国志・高贵乡公髦) |
| (40) 吾悔不听蒯通之计，乃为儿女子所诈。 | (史记・淮阴侯列传) |
| (41) 我也被推选去宣传。 | (将饮茶 p. 52) |
| (42) 我被她逗急了，…… | (热爱命运 p. 227) |

次は一人称が補語になる例である。

- (43) 多多益善，何为为我禽（擒）？ （史记・淮陰侯列傳）
(44) 被我咬断绳索，到得这里。 （水滸・第六十五回）
(45) 诸葛亮今番被吾识破。 （三国演义・第九十回）
(46) 她被我看得有点儿不好意思了，“不认识啦？” （当代 p. 39）
(47) 一九四三年国民党的党内政策更加反动，发动了第三次反共高潮，但是又被我们扛退了。 （毛泽东选集 p. 898）

人称制限のある日本語の受動文と比べて、中国語における「自己称揚の受動文」の存在が目立っている。杉村（1992）では、＜難事が話者本人或いは話者の感情が移入された存在によって達成されたという場合に＞用いられる受動文のことを「自己称揚の被動文」と呼んでいる。上記の例の一部も含めて、次の例がその類である。

- (48) 他把吉云的手稿放在一个皮箱里，叫我在机场查获了。
(49) 多少年谁也找不着，可叫我找到了。
(50) 桃子被我摘下来了，可花了多大劲儿……

しかし、次のような日本語の一人称主語の受け身文は中国語に訳すと、受け身文とはならないだろう。

- (51) 「泰子さん、それにいる人は誰れ……僕紹介されなかったな」と三瓶が言った。
（女面 p. 54）
(51') 泰子，那儿那个人是谁呀？你没给我介绍啊！
(52) 「……僕は出ると言われた時どうしようかと思った……」（友情 p. 81）
(52') 他让我出去(参加)的时候我真有点不知所措了。

4.3 使役文の場合

中国語の使役文の場合も受動文と同じように人称制限が見られない。通時的に考察して分かるように、一人称が補語に立つ使役表現は決して新しいものではない。但し、古代中国語に見られる使役文の主語に立つのはほとんど有情者であって、非情物が主語に立つ使役文が現れるようになったのは近代に入ってからのことだと思われる。

- (53) 「……缘君至孝，天帝令我助君偿债耳。」 （搜神记・卷一）
(54) 子令吾去。 （世说新语・德行）
(55) 他说还有一个案子未了，叫我代笔写个状子。 （将饮茶 p. 64）
(56) 到后来她不但支使妈而且支使我：让我去洗尿布，抹桌子倒水，甚至让我给她剪脚指甲！ （热爱命运 p. 266）
(57) “你去哪儿？”小杨问于晶。“我姨妈家，嗯，她叫我今晚去一趟。”（《王朔自选集》p. 13）

日本語には、次のような、一人称が補語に立つ例は少ない。

- (58) 「さあ、ナオミちゃん、そのまんま寝ちまっちゃ身体がべたべたして仕様がないうよ。洗ってやるからこの盥の中へお這入り」と、そう云うと、彼女は云われるままにな

- って大人しく私に洗わせていました。(痴人の愛)
(59) 彼女はうっとり、剃刀の刃で撫でられて行く快感を味わっているかのように、
瞳を鏡の前に据えて、大人しく私に剃らせていました。(痴人の愛)

中国語の、一人称が補語に立つ使役文を日本語に訳すと、能動文か使役受身文(被役文)になるのであるが、日本語には独特な被役文が存在していることも一人称が補語に立つ使役文が発達しない理由の一つと考えられる。他から不本意な動作を強いられることを前面化する被役文の主語は、省略されることもあるが、次の例に示されるように、明示されることも少なくない。

- (60) 「私はあなたなくしてこの世に生きることの寂しさをあまり強く味わされております。……」 (友情 p. 98)
(61) 他に二、三しゃべった後で僕もしゃべらされた。(愛と死 p. 169)
(62) 「今夜、娘に食事を奢らされることになっている。……」 (夜の噂 p. 32)

日本語のヴォイスの文において、基本的に一人称を補語に立たせないで、主語に立たせる原則が貫かれているのは、概して<視点の一貫性>を保つためであろうし、<視点>が原則として話し手(一人称)に固定しているからであろう。

一方、中国語では、次の例に見られるように、語彙的な手段によって不本意の動作を強いられることを表現することがある。

- (63) 电话是一个怒气冲天的女朋友打来的，说我害她在景山等了两个小时。(《王朔自选集》p. 3)

5. 授受表現と視点

日本語の授受(受益)表現(やりもらい)もヴォイスの一種と考えられるが、そこにも厳しい人称制限が見られる。このことも<視点>に由来すると考えられる。紙幅の関係でここでの考察は本動詞の場合に限定し、補助動詞としての用法(受益表現)についての考察は省略する。

5.1 日本語の場合

日本語の授受表現が非常に発達していることは日本語文法の一つの特徴にもなっているが、これは何よりも<視点>に起因するものと考えられる。そして、二人称・三人称に対する一人称の優位性として具現化している。具体的に言うと、<視点>がいつも一人称(または一人称側)に置かれているため、一人称>二人称>三人称という厳然たる優先順位が確立しており、三つの人称がそれぞれ与え手と受け手との関係を明示するために、授受表現の体系が発達してきたと考えられる。

- (64) 何を縫っているか、おあてになったらご褒美を上げます。(愛と死 p. 198) <1→2>
(65) 自分は写真を破るか、誰か西洋人にやろうかと思ったが…… (友情 p. 118) <1→3>
(66) 「名倉さんに名刺を差し上げておいたら」 (夜の噂 p. 20) <2→3>
(67) 太郎が花子にプレゼントをあげた。(日本文法 p. 38) <3→3>
(68) 「ええ。お座敷でお客様のくれるのを、そっと袂へ入れるから、かえると何本も出てくることもあるわ」 (雪国 p. 85) <3→1>

- (69) 電話でも下さった？ (宗方姉妹) <2→1>
(70) 「まあ、その二百万円の貯金帳と印鑑をあなたにくれたの？」
(午後の曳航 p. 113) <3→2>
(71) 夏子からはパリから出した手紙の返事をもらうまでに五通の手紙をもらった。
(愛と死 p. 189) <3→1>
(72) 「……一体あれは誰から貰った？」 (敦煌 p. 131) <3→2>
(73) ……名倉は、嫌みを言う口調である。つまり、自動車を一台売れば一割くらいの歩合は貰えるだろう、と言っていることになる。鬼多は、むき出しの返事を選んだ。
(夜の噂 p. 31) <3→3>

まず、「あげる」文と「くれる」文について考えてみよう。両者は与え手を主語にする点では共通であるが、人称上の制限に関しては正反対である。この人称上の相違は、「一人称 > 二人称 > 三人称」という人称の序列（一人称が一番上で、三人称が一番下、という序列）に現れている。具体的には、「あげる系」の文における与え手対受け手の関係は、<1→2/1→3/2→3/3→3>となっていて、与え手の人称より序列が上かまたは等しくなければならないという。それに対して、「くれる系」の場合は、<2→1/3→1/3→2/3→3>と、受け手は与え手より序列が上かまたは等しくなければならないということになっている。

「もらう」文の場合は、与え手対受け手の関係が<2→1/3→1/3→2/3→3>となっていて、受け手の方が序列が上かまたは等しくなければならないことが分かるだろう。

5.2 中国語の場合

日本語とは違って、中国語の受給の表現には人称制限は皆無である。その代表的な「給」の例を見てみよう。「給」には本動詞と動詞派生の介詞（前置詞）の両方があるが、ここではあわせて考察することにする。

- (74) 「……我还等着你给我那个意外的喜悦呢！」 (当代 p. 102) <2→3>
(75) 他马上打开香烟盒，取出一枝红塔山给我。 (当代 p. 48) <2→1>
(76) 「我给你一样好东西。」 (当代 p. 89) <1→2>
(77) 「这是她给你买的，难得一片苦心。」 (热爱命运 p. 82) <3→2>
(78) 「我……把妻子在国外的电话号码给了钮歌。」 (当代 p. 37) <1→3>
(79) 不久他将给于晁一个意外的惊喜。 (当代 p. 100) <3→3>

6. 事象構造と視点

中国語では、同じ動詞が方向性の正反対の動作を表現することがままある。例えば、日本語で「借りる」「貸す」はそれぞれやりもらいの受け手と与え手の動作を表すが、中国語では、“借”一つで両方の意味を表すことができる。そのため、同じ発話が二義的に取られることがある。

- (80) 我借了他 5 块钱。
(80') 私はあるの人に 5 元借りた。
(80'') 私はあるの人に 5 元貸した。

次のように表現すれば二義文は避けられるだろうが、日常的な会話ではコンテキストの助けを借りて例 (80) のような文でもさほど問題にはならないと思われる。

彭 広陸

- (81) 我向他借了 5 块钱。
(81') 私はあの人に 5 元借りた。
(82) 我借给他 5 块钱。
(82') 私はあの人に 5 元貸した。

現代中国語だけではなく、古代中国語でも、“借”と“貸”は両方とも「借りる」と「貸す」の意味を表していた。“沽”の場合も、「買う」の意味も「売る」の意味も表すことが可能である。

一方、“发工资（給料を支給する）”と“领工资（給料を受給する）”というような、意味が正反対する表現を、受給者がしても全然おかしくない。次の例（82）と（82'）が同じ意味を表すことが可能である。ここには<視点>の転換が観察される。

- (83) 今天我发工资了。（今日は給料をもらって来た。）
(83') 今天我领工资了。（今日は給料をもらって来た。）

“上课”の場合も二義文になることがある。

- (84) 我要上课去了。
(84') これから講義に行かなければならない。
(84'') これから授業に出なければならぬ。

“看病”の場合は、医者についても言えるし、患者についても言えるので、二義文になることがある。

- (85) 他看病呢。
(85') 彼は診療しているところだ。
(85'') 彼は診療を受けているところだ。

そして、“做手术（手術をする、手術を受ける）”という表現をお医者さんに用いるし、患者さんに用いる。

- (86) 他今天要做手术。
(86') 彼は今日手術をするんだ。

日本語の場合は、形式動詞による「手術をする」という表現は、お医者さんと患者さんの両方に用いることが可能ではあるが、「手術をうける」という受け手である患者さんの視点による表現も用意されている。

- (87) 難病の特発性拡張型心筋症に罹り心臓移植を薦められたがバチスタ手術をした私の体験記。(home.b00.itscom.net/snakajii/batista/ - 12k)
(88) はじめて相撲取りの手術をするお医者さんの失敗だったのだろう。(千代の富士)
(89) 彼は手術を受ける前日に取るべき注意を、かつて医者から聞かされたことを思い出した。(明暗)

以上のような違いは、相対的なことではあるが、中国語は視点が自由であり、同じ語句を使って動作参加者のいずれの視点からも表現することができるのに対し、日本語の場合は視点が固定されていて、基本的に動作参加者の一方の視点からしか表現できないのである。これを証明するも

のとして、以下の例を挙げることができる。

やりもらいや言語活動を名付ける三項動詞（僅かながら「助ける←→助かる」のような二項動詞もある）がペアになっていて、それぞれ動作の仕手と（間接的な）受け手の動作（正確に言うと、同一の動作の二つの側面）を表現することになっている。視点の対立と見なしてもよいだろう。そして、このような視点の対立は視点の不自由さ（固定していること）に起因していると考えられる。

貸す←→借りる
預ける←→預かる
授ける←→授かる
教える←→教わる
言付ける←→言付かる
助ける←→助かる

7. 結果の表現と視点

<動作>と<結果>は、対立する概念として捉えられることが多いが、中国語では、<動作>は動詞によって表現され、動作によってもたらされてきた客体の変化による<結果>は補語によって表現されるのが普通である。それに対し、日本語の場合は、往々にして他動詞が動作そのものを表し、自動詞が変化とその結果を表すことになっている。そして、動作と変化・結果を表し分けているペアになっている自他動詞は同根の場合がほとんどである。言いかえれば、日本語では、<動作>と<変化・結果>が言語化にあたってはっきりした対立をなすと同時に、また密接に関わっているということになる。

- (90) 烧水。
(90') お湯を沸かす。
(91) 水烧开了／水开了。
(91') お湯が沸いた。
(92) 锁门
(92') ドアに鍵をかける。
(93) 门锁上了／锁着呢。
(93') ドアに鍵がかかった／かかっている。
(94) 那一日天色很晚他敲开了安心的门，一进屋就把安心紧紧抱住了。（《玉观音》p.）
(95) 「どう育てたか、と聞かれても困ります。僕は何もしていません。真也は自分で買ったんです」（『朝日新聞』2008年2月13日夕刊）

中日両語を比較して分かるように、中国語では、同じ文（単文）において、動作と結果を同時に表現することができるのに対し、日本語の場合は、基本的にそれができないのである。この現象は、<視点>の観点からは解釈がつかだろう。

そもそも<動作>と<結果>は関わり合いながら、別物である。普通、まず客体に対する動作主体（仕手）の働きかけがあって、それから客体に起こる変化としての結果が生まれるのである。もし、動作主体の働きかけの開始から、客体に変化してその結果が現れるまでを一つの過程（プロセス）と見なせば、日本語の場合は、<視点>が固定しているため、他動詞が動作主体の働きかけを捉え、自動詞が客体の変化とそれによる結果を捉えているため、<動作>と<変化・結果>はそれぞれ違うシーンで表現され、シーンの転換が必要になってくる。他動詞によって捉えている時は<動作>が前景化され、<変化・結果>が背景化されるのに引き換え、自動詞で捉えている時は<変化・結果>が前景化され、

<動作>が背景化されることになると考えられる。一方、中国語の場合は、<視点>が移動できるので、このプロセスをワンシーンで連続的に捉えることができるのである。

8. 結語

以上、非常に大雑把に「視点」という観点からの中国語と日本語の対照研究を提案してきた。結局問題の提起に止まっており、言語事実への考察や論証が甚だ不十分であり、体系化や理論付けも今後の課題である。

注：

- ① 英語訳は高一虹（1997）による。
- ② ジェラルド・プリンス（1996：58-62）参照。
- ③ 松本正恵（1992）参照。
- ④ 党淑蘭（1991）では、「日本語は、視点を自分におきやすく、中国語は動作の主体におきやすい。（中略）日本人は自分を中心にして表現する傾向があり、中国人は事実の主体を中心にして表現する傾向がある。」と述べられている。
- ⑤ ただし、甘露統子（2004）は、金水敏（1989）の問題を引き摺って、相変わらず表出型の文の扱いが曖昧なのである。これについては、別稿で取り上げることにする。
- ⑥ 田中真理（2001）も『『ている』がついてると、話者以外の人が主語に想像される』というふうに言及している。
- ⑦ 例文の訳はいずれも筆者によるものである。
- ⑧ 挨拶言葉としての「行って来ます」は普通“我走了”と訳されているし、「行ってらっしゃい」の場合は、“早点回来啊！”になるところだろう。
- ⑨ 田中真理（2001）参照。

参考文献

- 東 弘子 1992 「感情形容詞述語文における感情主の人称制限—叙述の立場から—」『日本語論究 3』和泉書院
- 荒川清秀 1994 「買ッテクルと“买来”」愛知大学外国語研究室『外語研紀要』18号
——2005 「“買回来”と“寄回来”—中国語における他動詞+方向補語の構造—」『中国語学』第252号
- 荒 正子 1989 「形容詞の意味的なタイプ」言語学研究会編『ことばの科学3』むぎ書房
- 池上嘉彦 2006 「<主観的把握>とは何か—日本語話者における<好まれる言い回し>」『月刊言語』5月号
- 大江三郎 1975 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂
- 奥田靖雄 1992 『動詞論』北京外国語大学講義プリント（未公刊）
- 奥津敬一郎 1982 「ラジオ、テレビニュースの受身文——視点の立場から」『放送文化基金研究』
1983a 「不可分離所有と所有者移動——視点の立場から」『都大論究』20号
1983b 「何故受身か——<視点>からのケース・スタディ——」『国語学』132号
1992 「日本語の受身文と視点」『日本語学』8月号
- 加藤周一 2007 『日本文化における時間と空間』岩波書店
- 金谷武洋 2004 『英語にも主語はなかった』講談社
- 川上誓作、谷口一美編 2007 『ことばと視点』阪大英文学会叢書4、英宝社
- 甘露統子 2004 「人称制限と視点」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻編『言葉と文化』第5号
——2005 『語り』の構造」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻編『言葉と文化』第6号

於第 12 回中日理論言語学研究会（同志社大学大阪サテライト）

- 金水 敏 1989 「『報告』についての覚書」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 工藤真由美編 2007 『日本語形容詞の文法』ひつじ書房
- 久野 暉 1978 『談話の文法』大修館書店
- 高 一虹 1997 「再議“散点透視”與“焦点透視”——關於語言文化特性與可訳性的討論」『北京大学学報（外国語言文学專刊）』
- 澤田治美 1993 『視点と主観性—日英語助動詞の分析』ひつじ書房
- ジェラルド・プリンス 1996 『物語論の位相—物語の形式と機能』遠藤健一訳、松柏社
- 島田紀夫 1990 『絵画の知識百科』主婦と生活社
- 申 小竜 1991 『中国句型文化』東北師範大学出版社
- 杉村博文 1992 「遭遇と達成」『日本語と中国語の対照研究論文集』（下）くろしお出版
- 鈴木情一 1992 「視点の心理」『日本語学』8月号
- 須田義治 2007 「言語学的なナラトロジーのために」『国文学解釈と鑑賞』1月号
- 諏訪春雄 2006 「日本語の特色—移動する視点—」『日本語の現在』勉誠出版
- 田中茂範・松本曜 1997 『空間と移動表現』日英語比較選書6、研究者出版
- 田中万里 2001 「ディスコースと日本語教育」平澤洋一編『認知文論』日本語教育学シリーズ<第5巻>、おうふう
- 2004 「日本語の『視点』の習得：英語・韓国語・中国語・インドネシア語・マレー語話者を対象に」南雅彦・浅野真紀子編『言語学と日本語教育Ⅲ』くろしお出版
- 段銀萍 2005 「日語感情形容詞句“感情表出語気”典型句式探析」『日語学習與研究』第2号
- 寺村秀夫 1971 「“た”の意味と機能」『言語学と日本語問題』くろしお出版
- 党 淑蘭 1991 「中日の授受表現比較」『佐賀大國文』19号
- 西尾寅弥 1972 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 樋口万里子 2000 「ル／タ、テイルの意味機能試論」『九州工業大学情報工学部紀要』第13号
- 2001 「日本語時制表現と事態認知視点」『九州工業大学情報工学部紀要』第14号
- 彭 広陸 1994 「日本語の文における人称性」北京外国語大学日語系編『日本学研究論叢』第1輯、高等教育出版社
- 2000 「『買了三年沒有買到』をめぐって」『荒屋勸教授古希記念中国語論集』白帝社
- 益岡隆志 1992 「表現の主観性と視点」『日本語学』8月号
- 1997 「表現の主観性」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版
- 松本正恵 1992 「『見ること』と文法研究」『日本語学』8月号
- マティアス・マルティネス、ミヒャエル・シェップフェル 2006 『物語の森へ—物語理論入門』林捷、末永豊、生野芳徳訳、法政大学出版局
- 水谷信子 1985 『日英比較話しことばの文法』くろしお出版
- 森田良行 1995 『日本語の視点—ことばを創る日本人の発想』創拓社
- 1998 『日本人の発想、日本語の表現』中公新書
- 2006 『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房
- 森山 新 2006 「視点についての認知言語学的視察」『科学研究費補助金研究 基盤研究（C）課題番号 17520253 認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究～1年次報告書』
- 茂呂雄二 1985 「児童の作文と視点」『日本語学』12月号
- 渡邊亜子 1996 『中・上級日本語学習者の談話展開』日本語教育基礎研究シリーズ3、くろしお出版